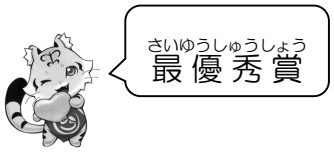
いいことはぜったいある
（５年）



５年生になってすぐに、国語で「銀色の裏地」という物語の勉強をした。この話は、三人仲よしだったグループが、学年が上がってクラス替えがあり、主人公の女の子が一人になってしまうことから始まる。

ぼくも、クラス替えをしたばかりで、仲のよかった友だちと離れてしまい、不安な気持ちで心がいっぱいになっていた。主人公の理緒は、新しいクラスで出会った、ちょっと苦手だと思っていた友だちに声をかけられ、仲よくなり始めていった。その友だちが、理緒に「いいことはぜったいある。」という言葉をかけたのだが、ぼくにも、この言葉がグッとひびいた。

それは、クラス替えをした次の日の昼休みのことだった。教室で一人、絵を描こうとしていた時に、４年生まであまりしゃべっていなかった友だちが「いっしょに外へ行って遊ばない？」と声をかけてきてくれたのだ。ぼくは、それまで、室内で遊ぶことが多かったので、不安だったぼくに声をかけてもらえたことと、なかなかしなかった外で遊ぶということが重なり、すごくうれしかった。そして、久しぶりの外遊びが、よけいに気持ちよく感じた。

「いいことはぜったいある。」ぼくにも、本当にいいことがおきた。それは、ぼくに声をかけてくれた友だちがおこしてくれたのだと思う。友だちのよさを感じられてよかった。次は、ぼくが友だちにそんな気持ちになってもらえるような声かけをしたい。